

令和7年度がん教育等外部講師連携支援事業 がん教育推進校実践報告

白山市立鶴来中学校

学級数：11学級 生徒数：269人

【テーマ】

「自分ならどうする？」という視点で、がんを自分事として捉え、がん患者との共生について考える。

1 はじめに

本校はこれまで、がんの学習については、保健体育科の保健分野で実施していた。教科書や映像資料等を活用することで、がんへの知識や理解を深めてきたが、自分とは遠い出来事という印象を持っていた。

そのため、本校でのがん教育のテーマを「自分事としてがんを考える」と設定した。がんについての知識を身に付けることのみに留まらず、実生活と関連付けを図り、自分なりの関わり方を考えることで、がんを身近に感じるとともに、深い学びに繋げていきたいと考える。

2 実践

(1) 保健における基礎知識の定着

事前の学習では、がんに関する基礎知識を「がんという疾病」「がんの要因と予防」「がんの早期発見と回復」の3つの視点で学習した。また、がん教育の事前アンケートの内容にも触れ、生徒の認識と実際との違いに気付いたり、正しい知識を身に付けたりすることができた。

(2) 外部講師との打ち合わせ・授業

本校のがん教育では、石川県がん安心生活サポートハウスはなうめより、がん経験者の久田充子氏を外部講師としてお招きました。講師との打ち合わせについては、テーマに沿って生徒の考えを深めることを重視して行った。がん経験者だからこそ語ることができる思いや苦労、嬉しかったことなど、

生徒が生の声を聞くことで、より自分事として考えるきっかけをつくることを共有した。

研究授業では、「もし、身近な人ががんになったら、自分はどうするか？」という視点でがん患者との共生について考える場面を設定した。また、身近な人ががんになった際に、自分にできることは何かを、理由も含めて考えた。個人思考で考えた内容を基に、集団での交流では多面的に考えを深めた後、がん経験者からの「嬉しかった関わり」について実体験を基にお話しいただき、その話をヒントにさらに個人で考えを深め、自分なりの考えを導き出すことができた。



(3) 生徒の感想

・生徒Aの感想

がんは誰もがなる可能性のある病気だから、なった人や自分がなったときにどんなことをしようかなと考えることができた。自分がされてうれしいことを、普段からもみんなにしていきたいと思う。

・生徒Bの感想

がんになったからといって何もできなくなるわけではないから、できることはさせてあげるのがいいと知ることができました。がんになってもいつも通りに接することは自分を認めてくれている、必要としてくれていると相手を安心させることにもつながるから、大事なことだと思いました。がんのことを知ることができて良かったし、これを機に自分の食生活を見直したりしていきたいと思います。

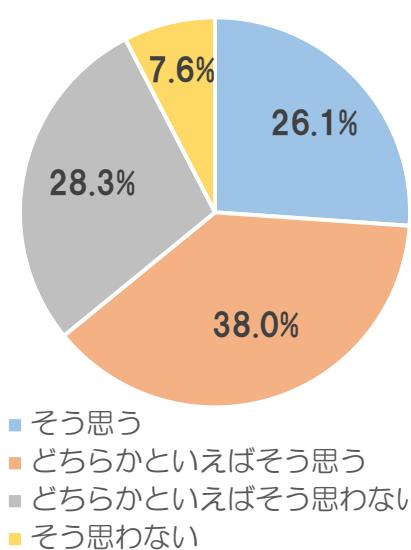
・生徒Cの感想

自分が、もしがんになってしまったときに、いつも通りに接してくれて、周りで支えてくれる家族や友達がいるなんて幸せ者だなと思いました。もし、周りの人ががんになってしまったら、自分も相手を近くで支えられる人になりたいです。

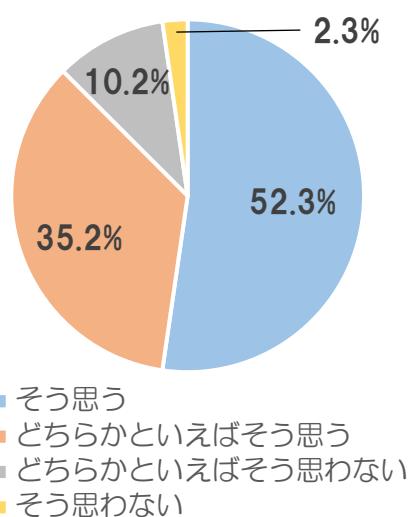
3 生徒アンケートの結果

がんになっても生活の質を高めることができる

【実施前】

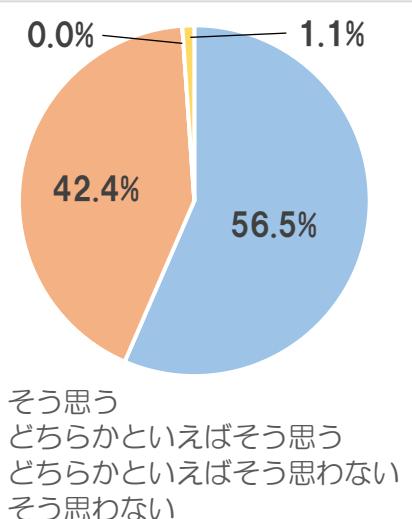


【実施後】

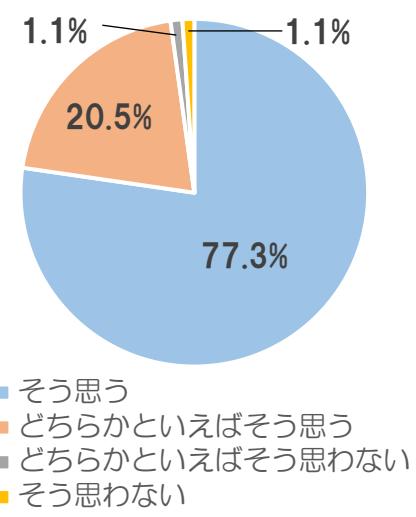


がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい

【実施前】



【実施後】



がん教育の実施前後で、アンケート結果のような変容が見られた。がんについての学習を通して、今後がんに罹患したとしても、考え方や周囲の支援で生活の質を高めることができると感じられた生徒が増加した。また、「がんになっても過ごしやすい世の中にしたい」の項目では、がん経験者の実体験を直接聴いたことで、がん患者との共生についての考えを深められたことが数値として表れた。

4 実践の成果と課題

○○成果○○

まず第一に、生徒ががんについて正しく理解ができたことが成果として挙げられる。がんは身近な病気であることや、早期発見をすることで治癒率が高まることについて理解を深めることができた。また、身近な病気だからこそ、将来がんと向き合うことになったり、がん患者と関わることになったりしたときに、自分ならどうするか、自分にできることは何かについて、他者と協働しながら深く学ぶことができた。

次に、外部講師としてがん経験者の久田氏よりお話を聞いていただき、がんの発覚から治療、回復までの実体験を生徒が直接聞くことで、がんについてより自分事として捉えて、深く考える機会となった。また、公開授業では生徒の学ぶ姿や考えた内容、発言を久田氏に価値付けていただき、自身の考え方や思いに自信をもって交流する姿が多く見られた。さらに、授業のまとめでは生徒一人一人が「自分ができるがん患者への関わり方」について自分の言葉で表現しており、生徒の学びの変容を感じることができた。授業後の生徒の感想には、自分事としてがんとどう向き合うかや、がん患者との関わりについて思いを深める記述が多く見られた。

◆◆課題◆◆

がん教育を進めていく前提として、生徒の家族ががんに罹患していることが考えられるため、授業内での表現や事前の確認を丁寧に行い、心理的な配慮を十分にしていく必要がある。その中で、生徒に伝える情報や考えさせる内容を外部講師の久田氏と綿密な打ち合わせを行った。表現と配慮のバランスをとりながら、授業のねらいをどこに設定するかについて熟慮することが必要であると感じた。

授業については、外部講師の体験談や説話を、授業のどのタイミングで話していただきを考えていく必要がある。生徒の思考の流れや広がりを妨げないように、かつ生徒の深い学びや新たな気付きを促すために、教師や外部講師からの発問の工夫が必要であると感じた。また、自分とがん患者との関わりについて、その考えに至った理由を強調して、他者と交流し合うことができれば、より自分事として考えられ、アンケートの「がんになっても生活の質を高めることができる」の肯定的評価がさらに増加したのではないかと考える。身近な病気であるからこそ、がんについて考えを深めて、自分事として捉えることで、生涯を通じて健康の保持増進を目指す資質・能力の育成につなげることができると考える。